

94 2/10

戦争抵抗者インター-JAPAN(WRI)犬山市築島飼町666水田355・向井孝

アチギズ(運)勅史のなかの、**掠**

Fü & Kou

■「社会運動史人名辞典」長いところかかってたけど、やっと終ったんやね。感想は？

♥ ウン、ぼくの受持ちには10人たり
ず、結局なんぼもよう書かんかった。
メ切日がきて不充分のまま放り出し
てしても、なんか悲しいなァ、いう
感じ。

■ でも星野草二さんを牛伝うて
「農村青年社」(略農青)関係のこ
とがようわかった。何よりの収獲也
というてたやないの。



泣く子に

(島村洋二郎)

■ ああ、それはほんまや。ぼくが星野さんが書きはった60人ほどの清書をき伝うたということは、その60人ひとりひとりの同時代的個人史が、個別にそれぞれの動きとして、農青社運動をとりかこんで、出会い重なりつながら、そして時代によって引き裂かれながらつむぎ出す、壮大な叙事詩的世界を具体的に感得するということやった。

それはとてもふつうの読書や資料あさりでは得られん大きな体験やった。

■ それともうひとつは、はじめからの脱線やけど、「運動史」というのは、学者・研究者によって、機関紙誌とか、組織決定文書、リーダーの著述といった、つまり印刷物として残されてる資料が根拠で書かれるしかないものともいえるけど、しかし実際の運動のなかには、いってみるとすぐ判るように、そのときどきの運動は、例えば「人名辞典」では書きしるすほどのことがほとんどない無名、普通の人たちの無償の献身によってこそ支えられ動いているものや。(もっというところ、その運動は、むかしぼくが書いた「おみこしかつぎの運動論」のメカニズムでうごいている。)

しかしそこへんのことか、(文書・記録などでは全くあらわれないために)全く見捨てられたままの「運動史」は、すくなくとも、大きな欠落があるということがいえるやろ。

■ 「人名辞典」をかきながら、しきりに「ぼくが思ったのは、ときには通称だけで出生地もその死没もはっきりしない」「ひとりの事蹟の片鱗をたずねて、数行の記述もかきあぐねてしまいがち。そのそれぞれの個人史のなかの、ほんの一点のようなもの、あるいは特別に記述するほどでないことの一部分や空白がいくつもいくつもかさなり、組みあがって、ぼんやりでてるもののなかからこそ運動史がみえてくるんやないか、ということやった。

も、と具体的にわかりやすいと、『大日方盛平』(一九二九)という人がいる。長野市出身の印刷工で、「農青」で検挙された。その事蹟は――

母子家庭に育つ。小学卒業後、信濃毎日、長野新聞社文選工として働く。一九二七同業の増田貞治郎から「自由連合新聞」・クロボトキン著「青耳に訴う」などをみせられ、アナキズムに共鳴。二〇五、母の死を契機に上京。神田活版所に入職。「全国労働組合自由連合会」「東京印刷工組合」員となる。田代儀三郎・松藤鉄三郎と知己になり、文芸誌「奴隷の血」を発行。四人で共同生活をはじめ。隣家に黒色戦線社「黒旗」編集発行人星野準二が引越してくる。八月、黒旗社発行「パンの略取」発禁で星野検挙される。二十九日の拘留後、奥西へいくという星野に同行。京都

の細いすき間で」手足を横にそろえ、背をまるめて、もう、息絶えていた。」この10日ばかり、水だけ飲んで、しに移住する。

ついで31年1月、大阪「アナキスト青年連盟」内に寄宿上野克己、李ネストル、和佐田英雄、平井貞二らと生活を共にする。3月、星野から、地下進行中の宮崎晃を紹介され、新しく設立した「農村青年社」の報告をうけて賛同する。8月末、アナ青連が解散したので、堺に下宿し印刷工として働く。12月、末阪したハ木秋子、田代を止宿させて、農青の資金調達のため奔走。

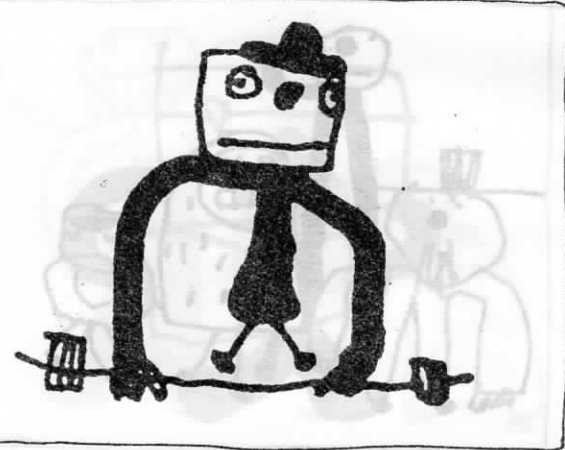
32年1月、平井、大串、李、山岡、田原保雄、遠藤氏らと議って、大阪「黒旗」を創刊。つづいて5月、「労働者の叫び」(山岡)、「農民の友」(7月)「無政府コンミュニ」(大串)、8月「如何に熟すべきか」(農青社パンフの複製)「大串」の共同発行。33年4月、在京農青社主力メンバー逮捕で、出版物も出ないので、田原と「記遊」を創刊。(5号で大阪平野署に検挙され、発禁処分)。

34年3月、運動挽回のため、逸見吉三方で開かれた「南東関西合同協議会」に参画出席。

35年4月、活路を東京に求め、山田彰方止宿の増田貞治郎を頼りに上京。山田の紹介で西山勇太郎を知り、西山か

ら教えられて、9月1日宮崎晃出獄歓迎会に出席。

同年11月1日、無政府共産党事件で二見敏雄の共犯小林一信を匿ったことが発覚、検挙される。さらに36年5月5日、農青社事件で草村欽治、船木上、別所孝三と共に検挙される。38年12月、東京地裁判決、徴役二年執行猶予三年。'42年5月刊「農村青年運動史」刊行会同人。'82年七回で没。



■「全く無名の今は誰知る人もない大日大盛平を、ともかくこのようにかけるのは、ことし87才を越えた星野さんの、全生のすべてをかけた「農青」にかゝわるおもしろいこと、また、この記述だけでいうなら、それで運動として何をどうしたんやという程のことではないかもしれへん。」

■しかし、この「大日方」の略歴に出てくる人名をかぞえると増田貞次郎、田代儀三郎、松藤欽三郎、星野孝二、上野克己、李ネストル、和佐田英雄、平井貞二、宮崎晃、大串孝之助、山岡比一郎、遠藤氏、田原保雄、逸見吉三、

西山勇太郎・小林一信・草村欣治・船木上・山田彰の名が出てくる。

もし煩をいとわず、この19名を人名辞典でひくと、そのひとりひとりにさらに10〜20人の名前が出てくるやろう。たとえば「山田彰」での人名は海野高衛・島津徳三郎・矢崎義久・鷹野原長義・伊沢ハナ吉・八木秋子・田中克巳・三上由三・(松藤鉄三郎) (宮崎晃) (星野華二) (西山勇太郎) の13名へカッコの5名は大目方と重複というふうで、このようにみていけば、関係する人名はその家族・兄弟などもふくめると、一体どのくらいになるやうか。

■ それゆえ、この無慮ともいふべき人々とりひとりの群像をおもいうかべ、彼らの生涯の一刻にはげしく去来した、さまざまな胸の痛みを考えると、やっぱりうかびあがってくるおぼろげな輪郭から「農青」運動史がはじめてみえてくるんじゃないか。

そして、すくなくともぼくにとっての人名辞典はそのような読み方・使い方によって、はじめて既往の運動史を見直すものとしての新しい意味を持つ。

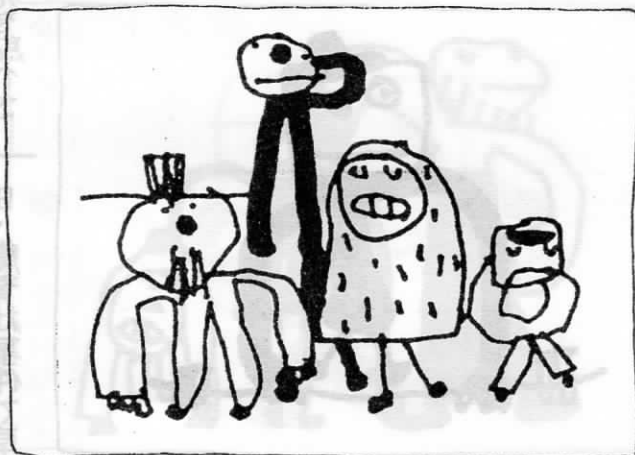
② 農村青年社

■ 脱線ついでにもうひと言すると、「農青関係者だから人名辞典にのせる」ということならば、ではその「農青

とはどんな運動か、日本の社会運動史のなかで、どう評価されてるものか」も当然問題となるやう。

ところが、「農青」というても誰も知らん、運動通史にものってへん。だからその評価なんてものがある筈もない。

たゞ学者研究者などが、50数年前の裁判記録をしらべると、たしかに「農青社事件」というのをみつけることができる。しかし、その事件は多分にデッチあげくさい。ある時の放談めいた主張が、立派な共同謀議に仕立てられ、入営兵との面会が武器、火薬庫の地形調査に仕組まれて、結果は、権力のその筋書き通りに一せいに検挙され逮捕され、徴役をくらった——ということでは多少はそんな運動的雰囲気らしいこと



のきEのに……」○ 生後三カ月ばかりの頃「千歳はとつていまだ先きから、のこのこわが家へはいつてきた。」

があったんやろ。ということと、ぼくなどもはじめは多分にそんな程度の認識やった。

へぼくの読んだかぎりでの、日本のアナキズム運動史にあられる事件は、いささかまぎらわしい事実を針小棒大的にデッサンあげられた「弾圧の事件」と呼ぶべきものであつて、革命運動へとすすむ未然での、あるいは最初の過程での挫折といつてよいものであり、「農青」もまた同じと思つていたのや、た。

■ところが一九七二年に、「一九三〇年代に於ける日本アナキズム革命運動—自由コンミュニンの樹立とその実践—資料農村青年社運動史」が刊行会から出版された。また20年めの91年に、黒色戦線社から「農村青年社事件・資料集・I・II」(全四巻のうち)が刊行された。へといつても、発行部数五百がまだ相当売れのこつてるといふのやから、ひろがりとしてはしれてるけど……

ところでぼくにとって、まず91年刊の本が出たとき、すぐ買ったんやけどその豊富な資料性、に圧倒されてよみきれんかった。

つまり、タテヨコ十文字的に要領よく目読して、大体の感じをつかむ読み方では到底読みこなせず、そのまゝになつたといふようなことやった。

■そして91年刊の本は、その標題がやはり「資料」と銘打って示されるようにへまたそれが「農青」のあり方であり主張であつたことをあらわして、これは、具体的な事実そのものとしての「運動史の資料」を提示することによつて、自己評価的に農青運動史として評論することをあえてきびしく抑制しているのや、ということにや、と気付いたんや、た。

■それは例え、資料集II⁴³「農民に訴ふ」を読むことだけでも明らかのように、知れば知るほどぼくのいままでの、一知半解の「農青」観を一変させるものや、た。またぼくの明治・大正・昭和のアナキズム運動通史に追補訂正をうかがうものであり、ぼくのアナキズムとその運動の意味を改めて考えさせるもんや、た。

いしかえると、「農青」は一九三〇年代・昭和戦前の、時代状況の中で、こゝろはじめて可能な革命を、方法的、実践的に提起すること、アナキズム思想を具体化しようとした日本のアナキズム運動史はじめての革命運動の提起や、た。

■しかしもちろん現代史が示すように「農青」は、徹底的なデッサンあげ弾圧と、急激に進行する軍国主義化によつて挫折潰滅する。

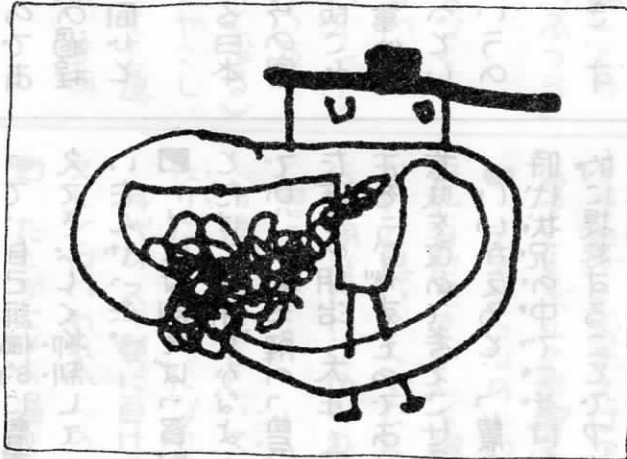
が、何よりも「農青」の特色を集約して言えば、まずそ

の時代状況に即応して、その状況の中でそのままでいられゆえ特別な条件や、突出した行動のへつまりはじめから全く不可能な、「体制」をひっくりかえしてからの新しい秩序社会を語るといった主張でなく、ごく日常的でありまたその生活をとらえなおして実行することを提起したこと。それやから、東京の「農青」グループの活動停止のあとにもなお農民たちの中でし、かりと生きつづけたことがあげられるやう。

■ それからいふと思ひ出したんやけど、去年の11月に山野さん東野さんを誘って、三重県の「ヤマギシカイ顕示博」をみにいったやう。

新島さんに案内されながらそのとき、ぼくは、突然脈絡もなしにふっとおもひつかけていたのが一九三六、七月に勃発した「スペイン革命戦争」のなかで出現した「農業共同体」のことや、一九三二年ごろから三四、五五年まで、とくに長野県の富県村・大門村などにひろがった「農青」運動のことやった。

そしてそれは、それらの経過と結末が過去のものとしてではなく、いまのいまの頃のなかで現代的問題をばらんで未分明のままにあるというところのあらわれに外ならない。



いもんやった。

(「付注の後記」) ● 顕示博をみて、私はおいちゃんちへ行って、ふどく居心地が悪く、ヤマギシカイのいまの勢態はアナキズムと無縁なところからでるといふ感じがしきりにした。へふうし

■ ぼくは、いまのヤマギシカイについての意見は、新島さんへ出した手紙(境4号掲載)につきる。つまり、留保や。(22)

③ 無名性

● 話をもどすと、一番はじめにおいちゃん「なんか悲しい」というたやう、それが気になつてくるんやけど……

■ ああそれなア、話せばだらだら長くなるけどなア。そもそものことからいくと、人名辞典とか、わりは、二冊ほどまえ渡辺一衛さんからの、「人名辞典のアナキスト関係」を受けたので予備知識を得たい……というふうなハガキや。「それ大へんや萩原普太郎さんなどに相談した……」

の追いかけてるときは、まるで知らんぷりだが」ふと、ぼくがまわりを見廻すと、すぐどこからか、

返事した。

数ヵ月した9月5日頃、大阪へ講演にきたいいだもさんに会場であった。「人名辞典の企画が具体的に進行して、収載する人名の「名出し」の段階にまわっている。アドバイザーとして協力してほしい」という話や。

■運動者の人名辞典といえは99年に青木書房刊で「日本社会運動人名辞典」へ約二十名を収載。そのうちアナは百人位？か？が唯一のもので、ぼくが話をきいてすぐ思ったのは、それに収められているいはのアナキスト達のことや、た。脳裏に伸びは二さんや林さんや、村上義博さんの顔がうかんだ。

「そうや、そんな人たちのお墓を一つ一つつくるつもりで、たとえ一、二行でもかいて名前だけでも残しときたい」とう思った。

■事務局から送られてきた編集委の会報によると、アナキスト部門の編集委員に、一ヵ月前に萩原さん玉川信明さんになっていた。萩原さんは75年に自家版で「アナキスト小辞典」へ約250名を収載を出して、その後も増補改訂を進めてた資料によって、もう80人ほどのアナキストの「名出し」ができてた。

その「名出しリスト」をみて、ぼくがつけ加えられるの

は100人ほどやった。しかし、それはほとんど名前だけの、生・死年月もわからんばかりで、とても自分で引受けてかく自信はなかった。

「無名」というのはそういうことなんや。書くに、これんという……。

●すると星野さんの場合は？

■「農青」に属するかぎり、星野さんは当事者やし、中心人物やし、もし書いてくれるんや、たら最上の執筆者や。それでぼくが頼みこんでアドバイザーに星野さんを引きこんだ。萩原執筆の「農青関係者」分を保留してもらって星野さんにぜひ書いてもらおうというので、それをぼくも手伝いますというのでー。

■そやから人名辞典についてぼくがやったこというたら、ひとつは、星野さんの「資料」という形でほとんどまわっている原稿の指定枚数にまよめる成文化。

オニは「萩原名出しリスト」に収められて、ぼくがかけそうなん、例えは、安田リキさんほか10人たらずの人についての執筆。そのほか「萩原リスト」のなかで文学者関係を星野さんと相談して寺島珠雄さんに頼んだことぐらいで、最初ぼくが自分の役目に課した無名者のお墓がわりに、といつことはほとんどでけへんかった。

● おいちゃん脳コックで入院してしもて、五ヶ月ほどなんも、モノ書かれへんかったもん：仕方ないなア：

無名者というたら、たとえば山鹿さんがて、おいちゃんが本へ「山鹿泰治・人とその生涯」アナキズムとエスプレントしをかくまでは無名やったんやろ。

■ ぼくは山鹿さんが病床に倒れて死ぬまでの教習所・上京して見舞のたびに、「なんでもエエ、同じことを重複しても、中途半端の書きさしてもエエ、思いつくこと、そのたびに書いて下さい」というてリコピー用紙を届けた。

そいで書いてもろたんが「たそがれ日記」と題をつけた手稿本や。

はじめはリハビリに役立つぐらいの気持ちで、それをどうするいう気もなかつたけど、山鹿さんの残した新聞・雑誌の切抜きや本など点だらぶを整理して「山鹿文庫」をつくる過程で、その「たそがれ日記」をもとにして、「評伝？」をかいたというわけや。

(山鹿さんの事蹟が)

それで一ぺんに、たとえば、中国近代史研究者などにも注目され知られるようになったんやと思つて。

④ 「あとりまえ」

● おいちゃんの「無名」というのは、つまり死後にその

人の書いたもの何が残ってへん。また、誰もその人について書きのこしてないということやな。

■ アナの100人中99人は、エリートの「ボル」とは対照的な、ふつうであたりまえの「たゞの人」やから、ごくごくの例外を除いて何かを書くのはみんな苦手やし、またボル系みたいにな、学者や評論家がおれへんから、自分のもとより同志仲間について書いたものも皆無にちかい。

ということからも、アナ運動は無名者による運動やとぼくは思う。

● わたし、生きてはったとき山鹿さんは知らんやけど、わたしが大阪に居付いた当座、74年ごろ、旭町の「泉原文化」のアジトへよう訪ねてきは、た河本乾次さんを覚えてる。

例会に必ず来るけど、そり坐って、みんなのおしゃべりを聞いてはるだけ。自分から発言しはるのを聞いたことない。遠い和歌山から、わざわざ来てはるのにまるで無口で、大正期からのアナキスト陶士というイメージにはあやそ縁遠い。そこの町で見かけるような何でもない「おじいさん」やった。

それは神戸の例会へいったときも感じたんやけど、古い経歴の、先輩の人はみんな黙ってはる。無口で、居てはる

「4年ぐらいになってたんやなア」○さっき、残照がゆっくり羽搏たいて、すうつと夜になったように」

のがわからへんほど目立たん人ばっかしやった。

■目立たんというのは、特別のばめけた人やない。何でもないふつうの人というところもあるやろ。つまり、そんなふつうのへだから「無名の」人たちがあつまって、「あたりまえの」ことをあたりまえにやればええんや」とやってきたのがアナキズム運動なんや。たーという一面を、そのことが何よりも示唆してるんや。

●ふつうのあたりまえの、ということを一面で認めるとしても、しかし別の面でいわゆるアナキストというたら、もう世間では箸にも棒にもかゝらんゴロツキ、無頼漢みたいにもおもわれてるし、また実際、そういうところがあるやんか。

■そうなんや、そんなところの問題が、アナキズムとアナキストと。そしてアナキズム運動史をとりあげるとき、の核心や。アナキストがあたりまえの人であるんや。たら、一体なんで無頼漢なんかい。

●それで思い出したけど、エスペランティストの宮本正男さんがうちへきは、たときの話。戦前、和歌山で伯父さんの貸家を、河本さん一派に借りられて、家を私、てもら



ったのが数ヶ月だけで、冬場はタキ物代りに床をはがして燃やしたりして、ほんまにひどい目にあわされた。アナいはヤクザ以上にタチが悪く手がつけられん。て。

■ぼくもそれきいて、ウソやろと河本さんに訊ねたら、

「いやあ、若いときは、」というて頭かいてはった。

●金がないから家賃払わん、たき木がなくな、たから障子や床板をはがして燃やすなんてことは、ふつうの人はようせん。

■しかしよう考えたら、ふつうの人やたらかえってやってしまふことやで。それよりほかにはしようがないんやから。そんな「絶対状況」や。たかどろかを別にしても、もしそんな状況や、たらと考えると、すぐわかるやろ。

それは、「農青」が農民に訴ふ

で、例えはー

「今日の窮迫せる農村は、納税する、しない、よりも不可能な状態にある。…私うわけのない税金は払うまい」
「今日の地主なるものが、土地の所有権を主張しても、

もともと土地は百姓のものだ。小作料、地代それは誰にも支払ふ必要もない』と叫びかけ、それに対してあたりまえの農民がそれを当然として呼応したように。

そやから、それは何も特別なことやあらへんごくふつつあたりまえの考えや。そして、そのあたりまえを、あたりまえにする、やるというのがアナキズムや。そこらへんのところが世の中ではどうやない、というところから逆転がおこる。

● しかし、国家相手に税金払わんというのと、家主やゆうても、特別悪徳家主ゆうわけでもない同じ庶民の一人やろ。それ相手に家賃払わん、その上障子や床燃やすいうんでは、だいたい意味あいがちこてる。わたしにしても相手が大阪市や、だから、立退きまで家賃三斗も払わん、壁はぶち破るなんてことや、たけど、民間家主や、たら、ちよ、ちよ、とようせん。誰も共感してくれへんで。

5、ふつつ、主義

■ 相手が誰だろうと、ない袖は振れん。寒けりやなんとか暖をとる工夫せなアカンというのは、アナキストにとってあたりまえの話やけど、しかし、時代と状況、場所



と関係のときどきによって、それは「あたりまえやけどあたりまえでない」ということになる。それでさっき「アナキズム」と「アナキスト」と「アナ運動史」を考えると、それが核心やというたんやけど、それを問題にするまえに

「あたりのふつつの人の「ふつつ」
「あたりまえ」ということについて云わんと、説明にならん。

● 「ふつつ」なあ。おいちゃん、自分のかつを「自分は特別人向やない、常識的なふつつ人向や」なんてよお云うし、そういうところもあるけど、根性はふつつとちがう。やっぱりアナキストや。

■ ま、いまそれはそれとして、よくが理解するアナキズムをさくばらんという、何よりも「ありのまま」「ふつつ」「あたりまえ」主義なんや。そやから、アホでも何でもすつと体得できるのがアナキズム。本読んだり勉強せんでも誰でもアナキストやれる。

● その本読んだり勉強したりせんでもアナになれる。ア

あげたときのおまえの」そうとびまわっていく綿毛のような 軽さだけ。」それを林の中の夕陽に埋に埋

ホでもす、と休得できるーちゃうのは、わたしの氣に入、
てるとこや。けど、おいちゃんがアナキストになったのは
そういうことではないやろ。

■ ぼくの場合、戦後まもなく、友人連中はほとんど日共
へ入党した。「社共合同」とかいうて大流行^{おあはれ}や、た。猫も
杓子も、元特高も。まるで戦中の裏がえしのようやった。
それで天のじやくのボクは、そういう雰囲気^{おあはれ}に反撥する氣
分で白眼むいてたら、大阪の山口が、新聞記事をみて、東
京で日本アナキスト連盟が設立された。一しよに加入せえ
へんかというてきたんや。

ま、そんな偶然みたいなキッカケでアナキストをやり出
して、十年、二十回たつうちに、だんだん「ふつうがアナ
キズム」いうことがわかってきた。

そやからぼくのアナキズムは、ふつうの何でもないうに
なりたい。あたりまえ、ふつうの生き方くらいし方がエエ、
特別はいやや、お断りという主義になった。

● ふつうの何でもない、あたりまえの生き方、くらし方
いうたら、結婚して、こどもくって、家庭もって、毎日仕
事にでかけて月給もろて、近所づきあい、親せきづきあい
をちゃんとして、他人に迷惑をかけるようなことはせず、
まして警察のこや、かいになるようなことは決していたさ

ず：ちゃうのがふつうや。(家賃をふみたおした上に障子や床
を燃やすなど、こんでもない話や)...

■ そうや。それがまア、ボウヤ。ボウはずっと、25年サ
ラリーマンまがいをしてたんやからな。

● だけとおいちゃんは、ダブルの背広に蝶ネクタイして
つとめてた時がて、ふつうとは思われてへんかったんや
がう。

■ ふつうの生き方くらいし方がエエ、特別はいややお断り
というのは、云い換えていうと、世の中に通用してる、い
わゆる世間のしきたりや常識にくくられた、まことしやか
な「ふつう」というのは大きい、氣にくわん。そんな「
ふつう」はくそくらえーというのが「本心」なんや。

● 「ふつう」に主義がつくところがふつうやない...

■ いまふと、ここ数回の宿題としてぼくが書こうとして
る評伝「安田リキ」の、リキさんがよう云うてた「うち
はアナキストやなんてリッパなもんやない。そのまわりで
うろうろしてた、たづの女^{おんな}探^{さが}屋^や、た」を思い出すんや
けど、大正の末から昭和初年にかけて、アナキストの一部
に運動資金集めの方法として、いわゆる掠^{さら}が一般化して行
われるようになった。ところが運動がだんだん低落して手
も足も出んようになってくると、大企業などからのなれ合

的資金強要だけは続いて、それが仲間同志での酒食放蕩に便溺されながら、生活の頹廢・グルーヴからの脱落・孤立・最後は数日前の掠(強喝)で逮捕などという結末へつながら、ていった。

● リキさんが昭和五、六耳頃、掠先で「笹川良一」と鉢合せしたこともあるというだけ。掠屋はいまの総合屋のハシリをつくったんやろ。

■ 笹川はアナヤなく右翼系掠屋やった。右翼へ紛っていったアナ掠屋もボツボツ出てきたけど、笹川みたいな大物に誰もなれなくて、その最後はアナに戻って、というよりふつうの市民にかえって、大てい陋巷で窮死した。

● 石川淳の「白頭吟」という小説に、リヤク傳というのが、ほんまに薄汚たなくエがかれて出てくるな。

■ そういうことをどうみるか、ということやけど、結論からいうと、ぼくはアナ掠屋への非難・悪口には簡単に組みする気持は全然なくて、何か悲しいなア、つらいなアいう気分や。(人名辞典がきながらのなんか悲しい気分もちよ、とつながってる)

● たとえば、あの「妙好人」みたいな、そして「掠屋」にはようならなかった河本さんが、若いときは家賃の踏み倒しをみんなと一しよとはいえ、やった、ということにつ

いて、おいちゃんはどうなふうに考えるの？

■ それは、アナキズムの「ふつう」ということの意味が長短両方の意味をもって、改めてとても大事で深刻な自覚的課題として迫ってくるというがー

(くりかえすと、昭和初耳という時流のなかで、とくに顕著にあらわれて「掠」をやり出した一部のアナキストたちが、だんだんアナキズム(運動)から離脱しながら、依然アナキストを名乗って「掠」をやり続けた。それはアナキズム、及びアナ運動史的にどんな意味か。もう少しだけ加えれば、そのような掠屋アナキストのほとんどが、もう牛も足も出なくなつて、ふつうの市井のなかにまぎれて、ふつうの人に成りながら、ほとんど窮死していったということの意味とアナキズムは、どんな関係があるか、ということなんや)

● その場合の「ふつうの人に戻って」という「ふつう」が問題の核心やと思うけど、もひとつわかりにくいなあ……

⑥ ヲアホ、ということ

■ ちょっと視点を変えると、長いことぼくが生きてきてこの頃しみじみわかってきたことは、「ふつうの人」の、(だから、どんな人にもありうる)「えらさ」ということ

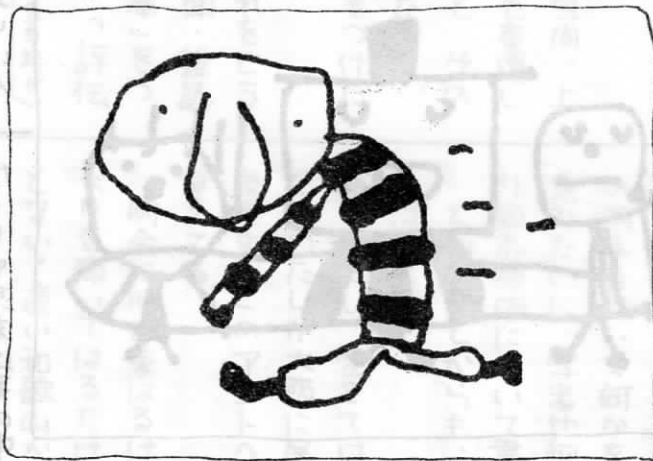
るんやけど、こゝで指摘されてるアナキストの「無名性」は、アナキズムの「ふつう」主義から生れ、出ていると思ふんや。

●「無名性」「ふつう」に關連してやけど、おいちゃんをみると天邪鬼アノマラカシというか、流れにいつも逆らう小教派で、やることはしつちやかめつちやかやのに、ちゃんと筋が通ってるとこなんか、生れつきのアナミたいな気がするけど……

■「生れつきのアナキスト」なんてあるかいな。アナにもホルにも、またそうならんかったんも、はじめはホルの偶然のキッカケからや。

●ほとんどの人がアナにもホルにもなれへんのは、そんなキッカケがなかったからというわけや。■たまたま「きっかけ」に出会った人が、アナやホルになっていくんやけど、しかし偶然やから、何も特別の人だけというわけやない。けど、そこから関西弁でいうハアホVとハカシコVでエライちこてくる。

●ハアホVとハカシコVやったたら、当然アナがハアホVで、ホルがハカシコVやな。



■「アナキズム」というのは、ハカシコVにはあまり当りまえず、まともすぎて、理想主義みたいなところがある。て、かえってわかりにくかったりする。

ところがハアホVなふつうの人間には、たとえば「相互扶助」とか「自由連合」とか一言、呪文みたいなもんをおぼえてしまたろう万重OK、という具合に簡単明快で、ほんまにあっさりアナキストになれる。

●なんやアナはまるで単純なハアホVばかりみたいやな。ハカシコVはおれへんのん？

■それはあるよ。けどほんまに少い。ま、例外的なというくらい稀少や。ハカシコVでアナキストになったひとは、だんだん、あんまりハアホVらしいアナ運動にあきれて、まじめで一生けん命のハカシコVほど、戦前も、ぼくのみてきた戦後でも、みんなホルになった。

（ところがホルに転向しても、10人のうち9人まで運動の内実がわかり出すとイヤになって脱党するか除名される。

が迫る！すでに九州・四国・関東より、せびききにくくどのまじしきり。宿泊希望者は連絡を。03-61-5880(水田)

アナからボルになってボルを全うしたという例は、ほとんどの見聞ではおれへん。というてまたアナにも戻れず、みんな中途半端になった。ヽ

ということでは、ともかくアナを一貫したハカシコは、それだけでや、ばしハアホの仲間やな。

しかし「ボル」になるのも偶然のキッカケやのに、なんで「ボル」の方がハカシコばかりでハアホはおれへんの？

■「ボル」はイデオロギーへの忠誠や組織のための献身がいつも要求されてる。理論武装のために不断の学習もせんならん。党が許さん恋なんかしとったら一ぺんに除名や。ハアホは場違いで、すぐ脱落する。ハカシコでないとしてもつとまらん。出世もでけへん。そやからハカシコがすぎて、「もとマルキストが、いま大企業社長」とか、もと都学連委員長が、いま流行の評論家ニシメ先生とかいった、もうびっくりしやくりの転向がでてくる。

●転向というたら、アナも大同小異とちがうの？

■それにあてはまるのは戦前のアナキストで、掠をやりながら放蕩無頼、やうやうのすさんだ生活をして、運動からも脱落した人たちが、へ大ていは戦中行方しれずになった。妻帯して、どうにか戦後まで生き延びた人も

市井の「ふつう」の人に戻って、ほとんど窮死してる。ヽ

●アナキストとマルキスト、ハアホとハカシコ、「ふつう」と「特別」、「無名性」と「指導者性」というなら、アナキズムの「ふつう主義」という意味が何となくわかる気がするけど……

でも「掠」の問題は、アナ運動史の問題として、もっときちんと取り上げなアカンのんちゃう。

■よくにこの「掠」は、高見順の「いやな感じ」、石川淳の「白頭吟」に描かれてるような問題をふくめて、昭和戦前期のアナ運動史の記述課題だけでなく、現代アナキズムの問題としてとらえなアカんのやけど、正直なところ、ぼくにはなんか「感じ」みたいなところでの、事実をそのまま肯定するようなことしか出てけえへんのや。それでこんど書く「リキさん伝」の題未定で、彼女の「掠」の意味をじっくり考えて、は、きりさせたい、と思ってるんや。

㊦ 掠

●「感じ」いうだけでは、わからへん、身内びいきとちがうの？

■またくりかえしみたいやけど、ふつうの人の「ふつう」なのは、「みんなの」「全体が」みとめるといつカッコ

つきのふつうや。へそしてその「みんな」「全体」は、個人ひとりひとりの寄り集ったもののやのに、いつも個を縛る枠になってる。

● ほな、アナがいう「ふつう」いうのは？

■ 一見同じみたいやけど、「みんな」とか「全体」とかに対立するものとしての「個」、個人の立場での「ふつう」や。

もっというところ、みんなを全体として縛ってる枠をなくして、ばらばらのままでゆったり自然に寄り集ってる「ふつう」や。つまり個の自立（WR）という個人責任（インディデュアル・レスポンシビリティ）についての「ふつう」や。（その「ふつう」が通用してへんで「斗い」となる）
● そんな「言葉の使い分け」で区別してもよけやかし、あさり云うたら、「掠」は「個の自立」からも、とも遠いような気がするけどな。」「個人責任」ゆうたら、まあ「個人責任」やうけど……

■ えらい廻りくどい説明になってしまっけど、まずオーに「アナキスト」というたかて、実際のところ、ええかげんなもんや。いつも「個人責任」を自覚し、日常行動を律してるなんてこと、ほとんどアヤシイ。しかも、ところが、世間にはそのええかげんのままでアナキストやとして通用し

てる……ということがある。

オニに「それは何でや」というと、アナキズムは「あんたもおまえも誰でもアナヤ」というような、それこそええかげんさを立場にしてるもんやし、また「そんなことしてそれでもおまえはアナが」なんて糾弾をやらかすのは、多少ともホルの影響をうけた「カシコ」のアナヤ。

● ええそつなの、わたしはまたアナキズムへアナキストほど自他をきびしく峻別し、ええかげんさを許さんもんはないと思ひこんでたんやけど……そやから、つきつめたら辻褄みだいのたれ死を選挙するしかなかったんやろ、と思つてた……

「掠」も金をとってくる面はしょうがないけど、金をせびりにいくようになったらしまいや。

時代のスウ勢に負けて、権力と馴れあうなんて、アナキストとはいわれへんのとちがつうの。

■ たしかにその通りや。そこでオニに「出てくるんや、つまり、そんなええかげんなもんではないようなアナキストが、果して自分がアナキストであるかないかどうかを自他に保証する根拠」云いかえたらそのアナキズムとは何か……ということやけど、それは、WR「日本の宣言で「反戦」に限定したかたちやけど、①私はどのような戦争

つく Ⅱ集。(森毅吉田智弥などいまだ新島は島内海軍を。おみやぐおとらしいと趙さんから 電話。国返へおひろり下すい。

も支持しない。②戦争原因除去の急出まづる行動をする。

③行動の基盤に非暴力直接行動をおく。ということがあつて、日この三つの立場に私が反するようになつたことがあつた場合、それを自覚する。否にいかかわらず、私はワーマンバーである資格を自動的に失ない、自ら除籍されるものであることを承認する。』に(や、反語的やけど)あらわれてるようにしー

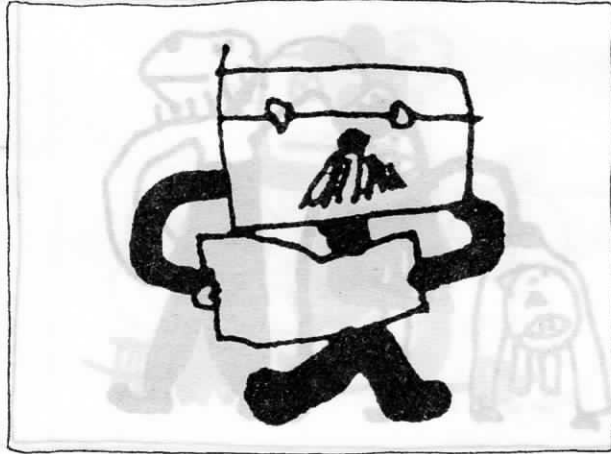
ー アナキストは、自分の一部始終をいつも己の中のもうひとつの自分にあるいはアナキズムで常に照らし出されている。』ということぢや。

それは孤立をあたりますのこととして自立することやし、自立というがぎり自分についての責任を、自分からは逃げられへんということぢや。

● おいちゃんがときどき、「秋風ぴゅー」とか、「谷底へおちていくしなんていう感じの」正体「やな。

■ そやから第四に「掠」は、自分にだけはごまかすことができへん、自分自身のアナキズムの問題や。

しかも現実の場合、自分がするくどくどうしようもない



ところへ随分ていくのが、よう判りながら、アホな弱いふつうのアナキストは、「もうおれはアホであれへん」ということでの、余計にそう自己破滅的に自分を転落させていくということが出てくるわけや。

● うーん。なんか「アホ」はあわれで悲しいもんやなア。

■ 昭和10年代、全く身動きでけん時代状況の下で、牛職のある者、親族縁故に頼れる者、学歴や才覚を活せる者などは、大ていは「ふつうのく」にもどった。あとに残されたいくばくかの人達は、もう掠もでけん世の中で、尚アホのひとり賞へのアナキズムを呪文にして「掠」を続けるか、右翼やウザになるしかなかった。そしてその最後は、もう悲惨というほかないものやった。

● おいちゃんが掠屋のことはアナ運動史にどうしても書き落とせへんというけど、そもそも掠屋はあの時代が生み出し、あの時代が消し去った、歴史やったんやなあ。

⑧ 運動史の意味

■ 気分をかえていうと、運動を考える場合、普通、「イズム」と「イスト」と「運動」へそして連続時間としての「運動史」は、連結して不可分の関係として同時代的にあるもんやから、一括関連的に語られて一向に差支えない。

ところが「アナ運動」の場合、その三つがズラい喰いちごてる。ズレながら一部でつながってる。

そのつながりを「連鎖あるいは網状の自由連合」というたらカッコええけど、そんないい方だけで割切れるもんでもない。

● ズれる方がむしろ「アナ」のあたりまえやな。

■ アナキズムを具体化するのには、もちろんアナキストの運動や。その意味でアナキズムとアナキストは不可分や。けど、そのアナキストひとりひとりが体现するのはアナキズムだけやない。アナキズムをふくむ個人全体や。

● そりゃあアナキストいうても、こはんの食べ方までア



ナキズムいうわけやないやろからなあ。

■ 個人を主体にして考えたら、アナキズムはその人のある時期の、さらにそのごく一部分でしかあれへん。

それはボルでも同じやろけど、ボルはその一体化を絶対として追求するのにな。アナは、ズレをあるべきこととしたうえでの、それぞれの追求があるんやな。

そこで改めてアナキズム運動(史)は、ということやけど、アナ運動いうたら、それこそ無名のひとりひとりの個人(史)があつま、た雑多な動きそのままの総合というか、水面に塵芥など一切合財をも浮かべて、ゆったり流れる大きな河のようなもんや。

(河が、例えばうずまいたり逆流したり走ったり、いろんな小さい流れがありながら、その一切で大きく流れるように)アナキズムの「本来」からズレたりはみ出したりした動きをその部分だけアナキスト個人から切り離すことはでけへんわけや。それもまたアナ運動そのものにちがいないねんから。

いづれ人知れずひとり死んでいった久保義さんをふとおもひ出す。もうそれが30年たつ。

■ そういうことでアナ運動史は、いわば無名の、まだ書かれたことのない「民衆史」とも呼ぶべきものと深く重なり、又通底している。それは「アホ」で「ふつう」の人たちのさまざまな生きざまにつながった無名のアナキストたちの、この世にのこした功罪を照し出し、糾すものとしてアナキズムの立場から書かれるものということになる。

● なんや、まるでアナは人間の業みみたいな運動やな。

■ そこがアナのアナであるところでもある。

● 死んでも何も残ってないアナキストを、人名辞典で何とか一人でも二人でも書きたいとおひちゃんがいってたのは、ただそんな無名の人たちが寂しいなア、なつかしいなア、ということからだけの意味やなかったというところが、ちよつとわかったヨ。

■ そんな「無名」の人の意味をとりあげへんかったら、アナ運動の本当の具体像は出えへんというところが、たしかにアナキズムにはあるんやけど、こんどの人名辞典では、ぼくは、まったく何ひとつでけへんかった。

生年月日も出身地もわかれへんし、遺族がわかって向合せても、「話さんや」ったので何もきいてないしとか「親兄弟にえらい迷惑かけて自分勝手放題しつとして死んだ者のことなんか、今更ほじくり出して書かんといてくれしと

かの返事はかりや。

● はじめにおひちゃんがいってた「人名辞典が終ってなんか悲しい」のが、なんやわたしにもうつってきたわ。

■ これでやめとこか。

付記

いま読み返してみると、①とつぜん「人名辞典」を発端に、すぐ「農青社」の口々に説明できてないから「掠」へ実態の説明も欠けてるしへと飛んで一転し、もうそれから、たゞぼくの心情吐露があるいはひとりよがりの思いこみといわれても仕方がないもので終ってる。「こらアカン、やめよ」と思ったものの「非暴力直接行動」を長いこと出してへん、ことに重ねて、唯一の云訳は、多分こんなアナの内幕について書くのは、いまどき、そうぼく位しかあらへんやろ。つまりアナ運動史である定的に黙殺されてきた問題を問題とする視点で、改めてアナキズムを省察したいというようなこと。従ってこれは、ほんの数人の顔をおもひつかべてのものとして、その方々に読んでいただく未定稿としたい。

② もうひとつ、文中にしばしば「ホル」を引合に出し、一方的で勝手都合のよい立場からの論議にとられるようなものとなっているのに気付く。これはまるで対照的であることでアナの特質を説明しようとしただけ、立場の相違で全く同様のことが「ホル」から指摘されることだろう。誹謗のつもりでは決していない。

小池 兼

▲生、没年不詳。
（一八九五〜）
▲職業、自
由業者 ▲出身、
東北地方（山形県）
▲交友関係、難波大
助、坂野良三、中野
誠、逸見直造

宮本三郎の回顧によると、一
九二一年六月に大阪で開いた借
家人同盟大演説会の一週前、
東京深川のドヤ街で活動してい
た小池兼が、何を思っ、てかふら
りと来合せた。何か仕事をした
いというので父逸見直造は、早
速三郎を助手につけ、演説会の
辻バラ吊りを頼んだ。辻バラと
いうのは、新聞紙大の厚紙バラ
を、二人一組で要所に釘を打っ
て吊り下げて廻るので、ちよっ
とした重労働だった。その小池
は印伴天に腹掛け、白パツチに
白ズツツという俣夫姿ながら、
色白の長身に背中まで長く髪を

垂らした貴公子風で、近所の女
工がさわぐ美男子だった。たが、適
には目がなくてその時も目当を
もらって、もろ車賃まで飲んでし
まい、切符の現物をもらって取
まで送られて帰京するという始
末だった。

それからしばらく消息なく、

句天皇の華燭というパンフが
東京で出廻って、小池が目をつ
けられているという噂があった
が、そのまま立消えた。そして
四月五日頃、兄の逸見吉三宛と
つせん句いま松沢病院にといこ
められて、狂人扱いされている。
何とかして助けてくれ、という
手紙が飛びこんできた。

それは四月二十七日、横政
ヒロヒトが議會開院式に赴くと
ころを難波大助が待受けて狙撃
し、未遂で捕縛するという、いわ
ゆる虎の門大逆事件が起った。
小池はその大助と教員目深川富
川町で同居したこともあって、
早速友人として差入面会に警視

庁を訪ねた。とたんに有無をい
わさず逮捕され、きびしく関連
を追及されたあげく、無関係と
判った。がそのまま松沢病院に
強制収容されたのだった。

吉三が小池のことを東京の山
崎今朝井護士に向合せると、

何度面会を求めても病院側に断
わられる。抗議した仲間は検束
ことは大逆事件であり、ヘタに
動くとオニの事件がデッカあげ
られかねない。小池には可哀想
だが、いまは事態を見守るほ
かない、という返事。

小池からはそのごも立てつづ
けに、「手紙よくで呉れたか」
「東京の連中は何もしてくれな
い」「ぼくは正気だ」「一日も
早く面会にきてくれ」と訴えな
がらだんだん月一度から両週に
なり、文字も乱れてしまいは
ちり紙に書いてきて、やがて途
絶えた。そして昭和八年四月頃
吉三が上京した際、山崎今朝井
にきくと、あるとき松沢病院へ

向合せたら「せんな者はいない」
との、とりつく島もないはなし
だったという。

小池はあの日警視庁へいった
日から、その存在すらも行方不
明になったままだのである。

小池兼の詩

定本柳井秀雄への批判、感想を
もたらすべく、の志意の編集集
でまとめられ。そうこれぞ
故柳井を、イオム時代にも
觸れるときは、いざうという
生別のおそいでつくつてもの。
「詩集」をよんで、ただでな
く、むしろ読まなければい
くてもうたい。NVD A
読者によんでもらえたら、
うれしい。申込んで下さい！
贈呈する。（無料）
▼落のとう 囚人のみの通る
径。感がでてる。「無茶」で
はいって上上信一の作である。